

札幌保健医療大学

2026年度 一般選抜入学試験前期A日程

国 語

2026年2月4日(水)

1時限目 9:30~10:30

注 意

1. この問題冊子は、試験開始の合図があるまで開いてはいけません。
2. 解答時間は60分です。
3. 解答用紙の受験番号欄に受験番号を記入してください。
4. 問題冊子は1頁～12頁、解答用紙は1枚です。
5. 解答はすべて解答用紙に記入してください。

□ 1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(なお、問題の作成上、本文の一部が変更されている。)

世代についての誤解のもっとも分かりやすい例は「戦後世代」ということばです。¹「戦後世代」というと、ふつうは「団塊の世代」のことを連想します。昭和二十年から二十五年生まれくらいの人々が戦後社会の基調を決定したのだ、というふうに。

でも少し考えれば分かることですが、「戦後社会」というのはぼくたちの世代が作ったものではありません。

戦後の日本の復興を(Ⓐ担)ったのは、明治生まれの人たちです。

だってそうでしょう。僕の父は明治四十五年生まれですが、その父は敗戦の年によく三十三歳です。まだ白面の青年です。ということは、敗戦直後において政治経済や文化的な活動を実質的に牽引^{けんいん}していたのは、明治二十年代、三十年代生まれの人々だったということです。

明治二十年生まれということは、漱石の『三四郎』の年頃の人たちです。三四郎は敗戦の年にまだ五十代なのです。今のぼくの年ですよ。夏目漱石が四十九歳で亡くなったので、ぼくたちはその小説の主人公たちもまた大正年間に死に絶えたと思いますけれど、漱石だって生きていれば敗戦の年にまだ七十八歳なのです。今の瀬戸内寂聴^{じやくちやう}や佐藤愛子より若いんです。

みんなが忘れてるのは、戦後の奇跡的復興の事業をまず担ったのは、漱石が日本の未来を託したあの「坊っちゃん」や「三四郎」の世代だということです。この人たちは日清日露戦争と二つの世界大戦を生き延び、(Ⓑ)大恐(コウ)と辛亥^{しんがい}革命とロシア革命を経験し、ほとんど江戸時代と地続きの幼年時代からスタートして高度成長の時代まで生きたのです。

そういう a の世代ですから彼らは根っからのリアリストです。あまりに多くの幻滅ゆえに、簡単には幻想を信じることはないその世代があえて確信的^(イ)に有り金を賭けて日本に根っかせようとした²「幻想」、それが「戦後民主主義」だとぼくは思っています。

ぼくは一九五〇年代は子どもでしたから、その世代の人たちのエートス^(注)をまだかすかに覚えています。小学校の先生や、父親たちの世代、つまりあの頃の三、四十代の人はほとんどみな従軍経験があつて、戦場や空襲で家族や仲間を失ったり、自分自身も略奪や殺人の経験を抱えていた人たちです。だから、「戦後民主主義」はある意味では、そういう「戦後民主主義的なもの」の対極にあるようなリアルな経験をした人たちが、その悪夢を振り払うために(Ⓒ)紡ぎ出したもう一つの「夢」なのだと思います。

「夢」というと、なんだか何の現実的根拠もない妄想のように思われるかも知れませんが、「戦後民主主義」はそういうものではないと思います。

それは、さまざまな政治的幻想の脆^{もろ}さと陰惨さを経験した人たちが、その「トラウマ」^(ウ)から癒えようとして必死に作り出したものです。

だから、そこには現実的な経験の裏打ちがあります。貧困や、苦痛や、人間の尊厳の崩壊や、生き死にの極限を生き抜き、さまざまな価値観や体制の崩壊という経験をしてきた人たちですから、人間について基本的なことがおそらく、私たちよりはずっとよく分かっているのです。

人間がどれだけプレッシャーに弱いのか、どれくらい b するか、どれくらい思考停止するか、どれくらい未来予測を誤るか、そういうことを経験的に熟知しているのです。

戦後日本の基本のルールを制定したのは、その世代の人たちです。

明治二十年代から大正にかけて生まれたその世代、(a)タンの)に言って、リアリストの世代が社会の第一線からほぼ消えたのが七〇年代です。「戦後」世代の支配が始まるのは、ほんとうはその後なんです。

はつきりしていることはその世代に比べると、戦後生まれのぼくたちは、基本的には自分たちの生活経験の中で、劇的な価値の変動というものを経験していないということです。飢えた経験もないし、極限的な貧困も知らないし、近親者が虐殺された経験もないし、もちろん戦争に行つて人を殺した経験ありません。貨幣が紙屑かみくずになる経験ありません。国家はとりあえず領土を効果的に保持していましたし、通貨は基本的には安定していました。

基本的に戦後日本のぼくたちはまるつきり「甘く」育てられているのです。

人間の本性がむき出しになるような究極の経験に現場で立ち会ったことがない。そういうほんとうの貧困も飢えも知らなかった世代の人たちが、七〇年代から社会の(c)中枢)を占めてゆくわけです。

極限的なところで露出する「人間性の暗部」を見てしまった経験があるかないかは社会とのかかわり方に決定的な影響を及ぼしただろうとぼくは思います。

「戦後民主主義」というのは、すごく甘い幻想のように言われますけれど、人間の真の暗部を見て来た人たちが造型したものです。ただの「きれいなこと」だとは思いません。誰にも言えないような(f)凄惨)な経験をぐり抜けてきた人たちが、その「償い」のような気持ちで、後継者に続く世代にだけは、そういう思いをさせまいとして作り上げた「夢」なんだと思います。

戦争も飢餓も本当のパニックも知らないぼくたちみたいな人間は、人間のほんとうの怖さというものを知りません。極限状況でのエゴイズムがどんなものか、指揮官が責任を取らないとどれほど破滅的な事態になるか、誰か一人が果たすべき任務を怠ることがどれほどの(g)災厄)を招くか、そういうことの、ほんとうの恐ろしさを実地には知らないのです。(中略)

ぼくが言いたかったのは、「暗部を見てしまった世代」は、もつと目線が遠い³ということ。ある集団内でのローカルな「常識」がどれだけ脆弱な基盤しか持たないか。ぼくたちの祖父や父の世代は、そういうことの危うさを骨身にしみ分かってしまった人たちだったけれど、こちらは生まれてから一度も、自分の「常識」が(Ⓔ覆され)た経験を持たない。そこにはずいぶん違いがあるだろう、ということ。とをぼくは言いたかったのです。

「戦後民主主義」が虚構だということをよく知っていたのは、たぶん「戦後民主主義」を基礎づけた当の世代です。それが虚構でしかないことを彼らは熟知していました。ほとんど歴史的な支えを持たないような弱々しい制度であるからこそ、父たちの世代は本気になって、それを守ろうとしたのです。

ぼくたちは父たちの世代が作り上げた虚構の中に産み落とされました。そして、それを「自然」なもの、昔からずっとあるもの、だから、どれほど裏切っても、傷つけても、(Ⓘ損なわれ)ないものだと思つて育つてきました。

だから、「目線が近い」のです。

自分たちが呼吸している当の社会制度が、「ほんの少し前」に、ある世代の人々の暗黙の同意の上に作られた、ただの「舞台の書き割り」にすぎないということに気づいていないのです。

ぼくたちの民主主義は、ある世代が共同的に作り出した脆弱な制度にすぎません。ちょうど映画のオープンセットの建物のように、表だけあって、裏には何もありません。それを守るためには、それが「弱い制度」だということを十分に腹におさめておかなければなりません。自分のいる世界(たとえば業界)が、たまたま出現した暫定的な制度にすぎず、それができるまでには、それなりの「前史」があり、何らかの歴史的必然性が(Ⓐ要セイ)したからこそ出現したものであり、歴史的條件が変われば変容し、ときには消え去るべきものだ、という当たり前のことを分かっていない人があのような(Ⓚ醜態)をさらすのです。

「戦後民主主義」の最良の点は、社会体制は成員の同意によつて作られる暫定的な制度に過ぎないという、ロックやホブズやルソーが説いたような、リアルでクールな社会観に支えられていたということだとぼくは思います。

社会成員が、自分たちが同意した制度を守るために、自分の仕事の「割り前」を果たすという基本的な責務を忘れたら、社会制度はもう持ちません。民主主義は「民主主義を信じるふりをする」人たちのクールなリアリズムによつて支えられているものです。

「民主主義ではない制度」はいくらもありえます。成員が民主主義社会を「信じるふりをする」という自分の責務を忘れたら、ぼくたちの社会は別の制度に簡単にシフトするでしょう。民主主義というのは、そのことを知っている人たちの恐怖心に支えられた制度です。

ぼくたちの時代が失ったのは、この「恐怖心」⁴なのだと思います。為政者の腐敗や、官僚の不誠実や、リーディング・カンパニーのモラルハザードのすべてに共通するのは、「この社会はオレが支えなくても、誰かが支えてくれる」という楽観です。そんな「誰か」はどこにもいない、ということがぼくたちの世代には切実には分かっていないのです。

(内田 樹『疲れすぎて眠れぬ夜のために』による)

注1 エートス(世代や集団などを特徴づける気風や慣習)

注2 あのような醜態(その頃に相ついだ食品の産地偽装や消費期限の改ざんなど)

問一 文中()部(a)~(k)の漢字については平仮名で読みを答え、カタカナ部分(b)(d)(j)については正しい漢字を語群から記号で選びなさい。

- (b) 大恐コウ (①興 ②候 ③慌 ④構 ⑤荒)
(d) タンの (①単 ②短 ③端 ④淡 ⑤探)
(j) 要セイ (①省 ②精 ③盛 ④請 ⑤勢)

問二 傍線部(ア)~(エ)の語句の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ一つ、記号で選びなさい。

- (ア) 白面の青年 (①可能性を秘めていること ②純真無垢なこと ③身体が弱いこと ④幼稚っぽいこと ⑤経験が乏しいこと)

- (イ) 確信犯 (①確実に達成できる犯罪 ②緻密な準備による犯罪 ③信念に基づいた犯罪 ④理想実現を目指す犯罪 ⑤組織的計画的な犯罪)

- (ウ) トラウマ (①精神的な挫折 ②精神的な外傷 ③体験の精神的影響 ④精神的な絶望感 ⑤精神的な葛藤)

問三 空欄部 a b に、それぞれ最も適当な四字熟語を次の中から記号で選びなさい。

- (①七転八倒 ②茫然自失 ③付和雷同 ④粉骨碎身 ⑤波乱万丈)

問四 傍線部1『戦後世代』という、ふつうは『団塊の世代』のことを連想します」とあるが、戦後世代を特徴づける一語を文中から抜き出さない。

問五 傍線部2『日本に根づかせようとした『幻想』とあるが、その具体的な説明として最も適当なものを次の中から一つ記号で選びなさい。

- ① 生きるか死ぬかの過酷な日々を生き抜いた人たちが、後の世代がそれぞれの夢や希望を実現できるクールな社会を目指したこと。
② 想像を超える幻滅や絶望を日常的に連続して体験した世代が、生きる苦しみを体験しないで済む「戦後民主主義」をつくりあげようとしたこと。
③ 「償い」の気持から、人間の本性がむき出しになるような醜い陰惨な世界をつくらないための政治体制を作り上げようとしたこと。
④ 政治的幻想の脆さや凄惨な体験をした世代が、後の世代に同様の経験をさせまいと作り上げた民主主義のこと。
⑤ 後に続く世代が二度と悲惨な経験をしないように、確固とした社会体制のもとで理想の社会を作ろうとしたこと。

問六 傍線部3「目線が遠い」とあるが、この慣用語の意味として適切な具体例を次の中から一つ記号で選びなさい。

- ① 食糧を増産するために農地の拡大や大型機械の導入など、生産力を高める効率的な方策に切りかえる。
- ② 会社の順調な業績が続いているが、少子・高齢化の時代が去った後の生産体制のあり方を考える。
- ③ 医学的な見地から健康調査を行い、食事や嗜好品など栄養学に基づき指導とアドバイスを行う。
- ④ 高度の情報化社会の中、その利便性を悪用する犯罪が増加しているため、関連する機器を遠ざける。
- ⑤ 原因不明のウイルスを解明するために、研究会への参加や患者への実態調査など活動の幅を広げる。

問七 傍線部4「この『恐怖心』」の意味として最も適当なものを、次の中から一つ記号で選びなさい。

- ① 戦後民主主義は凄惨な経験をしてきた人たちが作り上げた虚構であることを知らずに、甘い幻想に浸されていく恐怖心。
- ② 自分たちが望む社会制度や体制に、実際には変革できないのではないかという恐怖心。
- ③ 民主主義は「誰か」が支えるものという樂觀が蔓延まんえんすることによって、別の制度にシフトされていく恐怖心。
- ④ 社会体制は暫定的なものに過ぎず、歴史的条件が変われば変容や消滅していくという恐怖心。
- ⑤ 民主主義はもともと確固としたものではなく、成員各人が責務を果たさないと別の制度に変容してしまうという恐怖心。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(なお、問題の作成上、本文の一部が省略されている。)

病気の家族の入院に付き添って病院に行った経験のある者なら、次の文章を読むと、そのときのあの妙に空白な心地をまざまざと思い起こすにちがいない。

部屋へ帰ると碧郎は寝入って、臨時の看護婦が額の汗を職業的な修練を見せて拭いてやっていた。電燈に半分シェードがしてある。しんかんとしていた。大きな病院で病室もたくさんらしいのに、しんかんとしていた。碧郎もしんかんと寝ているし、汗は続々と噴きだしている。……手持無沙汰と頼りなさを押ししずめて、げんは小椅子にかけた。

これは、幸田文の名作『おとうと』(昭和三十二年)の一節である。彼女は二十二歳のとき、(①ケツカク)で入院した三つ年下の弟成豊に付き添い病院暮らしをする。そのときの看病体験がこの作品に実写されている。作中では文はげん、成豊は碧郎となっている。文の父は文豪幸田露伴であり、義母は病気がちだった。したがって弟の世話はすべて姉文の肩にかかっていた。

幸田文は、病院の印象を「しんかん」ということばで表現している。このあとも「遠い電車の音さえしんかんとして」、あるいは「しんかんとした白い天井、(②ショウドクザイ)のにおい、暗くした電燈」というように、たびたびこのことばを使っている。

「しんかん」「ア □ □ 閑・□ □ 閑」とは、物音がしないで、ひっそりと静まりかえっていることをいう。しかし、ここで幸田文が言っているのは、物音は聞こえるが、なにかしんとして、ひんやりとした、どこかよそよそしい、妙な静けさである。

たしかに、病院というところに来て患者や家族がまず味わうのは、そこがかもし出す日常とはかけ離れた異質な音や色や匂いである。石川啄木も明治四十四年東大付属病院に入院した初日に友人にあてた手紙で、「まだ八時にもなるまいと思ふのに、病院の夜は閑寂としてゐる」と書いている。閑寂とはひっそりと静まりかえっていることをいう。

その病院特有の妙な静けさを感じるのは、「こちらの心の中がしんかんとしているから」と考える幸田文は、そのしんかんとした彼女の心に聞こえてくるある音に耳をそば立てる。

ここは静かではあっても街のなかの病院だから、雑音は絶えず伝わってくる。それがしんかんとしているように思えるのは、こちらの

心の中がしんかんとしているからなのである。そんな状態のとき、氷嚢・氷枕は心臓に浸みる音を立てるのだった。そのときもそうだった。折角来た父は息子の容態の悪さに、祈るような姿で眼を閉じていた。げんは弟の枕もとにいる。からつと云うのだ。からつと乾いた音がするのだ。氷嚢の水が溶けかかると、一ツ一ツの破片は身じろぎしはじめ、おたがいの氷結から、からつと音を立てて離れるのだ。離れ落ちる音なのか、離れた(③拍子)に他の氷片にぶつかる音なのか、からつと乾いた音がする。とつさに骨を感じさせる音なのだ。

医師や看護婦のように病院を日常の職場としている者にとっては、病院は「しんかん」とはしていない。いわんや「心の中がしんかんとして」いることはない。しかし、病人に付き添い「心の中がしんかんとしている」者にとっては、その「しんかんとした心の中」に聞こえてくる物音がある。たとえば、氷嚢や氷枕の水が溶けて立てる「からつと乾いた音」「骨を感じさせる音」である。それは「心臓に浸みる音」なのである。

弟の「入院以来、げん(文)はその音を何度聴いたか。いやな音ではない。むしろとげとげしくもない音なのだが、連想は枯渴した骨の音である」。父親が見舞いに来たときもその音がした。すると、「眼をつぶっていた父親は、そのからつという音で腕を組み直すと、じいっと氷嚢を見つめた。見る見る眼に角が立つて、怒気のようなものがあがってきた」。すると父親は、「頼むよ、げん」とそれだけ云って帰って行った。幸田文は、「氷に負けて帰る父をげんはいたわった」と書いている。

病人を看病するということは、このように日常では感じられない物音を聴きとることまで必要なのである。あるいは、病人を看病することによって、日常では聴きとれない物音を聴きとる感性を(④ミガ)かれるのである。(中略)

病いはその病いになっている病人本人だけのことではすまない。病人はいうまでもなく医療を必要とし、医療はすぐれて専門的な問題である。ところが、病人は医療とともに看とり(ケア)を必要とする。病いには看護・介護という(⑤フカヒ)な問題がありこれも、専門的な部分もあるが、ふつうは家族など素人が担わされる部分が圧倒的に多いのはいうまでもない。幸田文のように、弟が病気になるれば、姉として看病するのはよくあることである。

この看とりの問題について、日本で最初に文学的作品として取り上げたのは正岡子規であった。かれはその書名「病床六尺」の通り、長年病床で身動きもできないまま苦痛にさいなまれ、三十六歳で世を去る。その子規は『病床六尺』(明治三十五年)で、「²死生の問題は大問題であるが、それは極単純な事であるので、一旦あきらめてしまへば直に解決されてしまふ。それよりも直接に病人の苦楽に関係するの

は家庭の問題である、介抱の問題である。病気が苦しくなつた時、または衰弱のために心細くなつた時などは、看護の(6)如何が病人の苦樂に大關係を及ぼすのである」とまず語り、さらに次のように論じているのである。

病気の介抱に精神的と形式的との二様がある。精神的の介抱というのは看護人が同情を以て病人を介抱する事である。(b)形式的の介抱というのは病人をうまく取扱ふ事で、例へば薬を飲ませるとか、包帯を取替へるとか、背をさするとか、足を按摩するとか、着物や蒲団の工合を善く直してやるとか、そのほか浣腸沐浴は言ふまでもなく、終始病人の身体の心持よきやうに傍から注意してやる事である。食事の献立塩梅などをうまくして病人を喜ばせるなどはその中にも必要なる一条件である。この二様の介抱の仕方が同時に得られるならば言分はないが、もしいづれか一つを扱ふといふ事ならばむしろ精神的同情のある方を必要とする。

とはいえ、「世の中に沢山ある処のいはゆる看護婦なるものはこの形式的看護の一部分を行ふものであつて全部を行ふものに至つては(7)甚だ) 乏しいかと思はれる」と指摘し、さらに「看護婦として病院で修業する事は医師の助手の如きものであつて、此処にはゆる病気の介抱とは大變に違ふて居る」ときめつける。そして、人を看とるといふことはどういふことか、子規はこう言うのである。

病人を介抱すると言ふのは「イ 畢竟」病人を慰めるのにほかならるのであるから、教へることも出来ないやうな極めて此未なる事に気が利くやうでなければならぬ。例へば病人に着せてある蒲団が少し顔へかかり過ぎてゐると思へばそれを引き下げてやる。(中略)あるいは病人の意中を測つて食ひたさうなといふものを旨くこしらへてやる。簡様な風に形式的看護と言ふてもやはり病人の心持を推し量つての上で、これを慰めるやうな手段をとらねばならぬのであるから、看護人は先づ第一に病人の性質とその癖とを知る事が必要である。けれどもこれは普通の看護婦では出来る者が少いであろう。多くの場合においては母とか妻とか姉とか妹とか一家族に居つて平生から病人の癩癩の工合などを善く心得てゐる者の方が、うまく出来るはずである。うまく出来るはずであるけれども、それも実際の場合にはなかなか病人の思ふようにはならぬので、病人は困るのである。

「病人を慰める」といふと、いかにも簡單なことのようであるが、「病人の心持を推し量つての上で、これを慰めるやうな手段を取らねばならぬ」といふことになれば、それは並大抵のことではない。文字通り「病床六尺」に「ウ 呻吟」しながら、⁴ 母親と妹から例外的とも

いえる献身的な看護を受けていた子規にして、やはりいちばん言いたかったのは「病人を慰める」という看とりの原点ともいうべき一事だったのである。

(立川昭二 『病いの人間学』による)

問一 文中()部①から⑦の漢字の読みを平仮名で答え、カタカナ部分については漢字に直しなさい(楷書で丁寧書くこと)。

問二 文中空欄部「ア(しん閑)」の「しん」に該当する漢字を次の中から一つ、記号で選びなさい。

- () ① 伸 ② 森 ③ 身 ④ 心 ⑤ 真 ⑥ 深 ()

問三 空欄部「イ」、「ウ」の語句の意味として最も適当なものを、それぞれ記号で選びなさい。

- 「イ 畢竟」() ① 換言すれば ② ひいては ③ 肝心なことは ④ つまるところ ⑤ 最後まで ()

- 「ウ 呻吟」() ① 心が高揚する ② 作品に命をかける ③ 創作に苦しむ ④ 作品に没頭する ⑤ 気分が落ち込む ()

問四 二重傍線部(a)～(c)の対義語として最も適当なものをそれぞれ語群から記号で選びなさい。

- (a) 特有 () ① 平均 ② 共同 ③ 均質 ④ 共通 ⑤ 公平 ()

- (b) 形式 () ① 実質 ② 実像 ③ 名実 ④ 実態 ⑤ 事実 ()

- (c) 簡単 () ① 至難 ② 複雑 ③ 難題 ④ 詳細 ⑤ 困難 ()

問五 傍線部1「見る見る眼に角が立って、怒気のようなものがあがつてきた」とあるが、なぜ父親はそのような表情を見せたと思われるか。その理由として最も適当なものを次の中から一つ記号で選びなさい。

- ① 目の前で命が消えようとしている息子への治療が十分でなかった父としての責任を、氷の音が追い打ちをかけて責め立てるから。

- ② 二十歳に満たない我が子の命が、暗く静かな病院の一室ではかなく消えていこうとしている悲痛さに耐えられないから。

- ③ 年の若い息子を失うことになった経緯を思い起こし、父親としてのこれまでの自分の在り方を責め立てているから。

- ④ 病状の回復を期待して来たが、いまにも消え入りそうな息子の姿を目の当たりにして、これまでの対応や判断の甘さを後悔しているから。

- ⑤ 静まりかえった病室で息子の容態が絶望的だと悟った時のいたたまれない辛さを、氷のくずれる音がさらに耐え難いものにしたから。

問六 傍線部2「死生の問題は大問題であるが、それは極単純な事であるので、一旦あきらめてしまへば直に解決されてしまふ」の説明として最も適当なものを次の中から一つ記号で選びなさい。

- ① 死んだ後の家族のことや死後の世界のことは誰にもわからないものだと言明してしまえば、問題を克服できるということ。
- ② 生きることや死の意味を考えることは重要だが、そのことを忘れてしまえば意外に単純な問題であることに気づくということ。
- ③ 死ぬことへの不安や恐怖は大きなものだが、生への執着が断れば悩むこともなくなるということ。
- ④ 人に限らず全ての生きものの死は常に予測不能なものであることを理解すれば、生への願望を断ち切ることができるということ。
- ⑤ 死がせまりくることの苦悩は深く大きいですが、介護が十分なされていれば死への恐怖を感じなくてすむということ。

問七 傍線部3「看護婦として病院で修業する事は医師の助手の如きもの」とあるが、その説明として最も適当なものを次の中から一つ記号で選びなさい。

- ① 医師の指示を受けて医学的立場から処置をおこなない、患者への慰めや同情による介抱をおこなわないこと。
- ② 医師とともに治療の一環として患者に対応し、医療従事者としての形式的介抱をおこなうこと。
- ③ 医師に適切な情報を提供しその指示を適切に判断し、患者の容態にそつた医療をおこなうこと。
- ④ 医師に協力して患者と家族をサポートしながら形式的な介抱をすること。
- ⑤ 医師による治療を医療技術の面から支え、患者の心身をサポートすることはないこと。

問八 傍線部4「母親と妹から例外的ともいえる献身的な看護を受けていた子規にして……」とあるが、その説明として最も適当なものを次の中から一つ記号で選びなさい。

- ① 母と妹の看護によつて精神的介抱の重要性を知り、看とりのあるべき姿を暗示している。
- ② 家族の手厚い看護を受けていた子規が求めるほどに、精神的な介抱が重要であることを示している。
- ③ 一般の人よりも手厚い看護を受けていた子規でさえ、看護について不満を持っていたことを示している。
- ④ 通常では考えられないほど恵まれた看護を受けていた子規でさえ、精神的な介抱が困難であることを示唆している。
- ⑤ 家族が自分を犠牲にしてまで子規を介抱していたことを称賛し、看護のあるべき姿を示している。

